OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	＜翻訳＞安徽大学蔵戦国竹簡概述
Author(s)	黄, 徳寛
Citation	中国研究集刊. 2018, 64, p. 24-37
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72895
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

中国研究集刊　珍号（第六十四号）平成三十年六月　二四―三七頁

安徽大学蔵戦国竹簡概述

黄　徳寛
（草野友子監訳、鳥羽加寿也・原毎輝・六車楓訳）

本稿は、黄徳寛「安徽大学蔵戦国竹簡概述」（『文物』二〇一七年九月（総第七三六期）、文物出版社）を、原著者の了解を得て翻訳転載したものである。

著者の黄徳寛氏は、安徽大学が二〇一五年に入手した竹簡（略称「安大簡」）の整理・解読を主導し、その概要を右の『文物』に発表した。黄徳寛氏は、安徽大学教授在任当時に当該論文を執筆され、二〇一七年十一月に清華大学の教授として清華大学出土文献研究与保護中心に転任された。今後も、安大簡の整理・研究を主導されると同時に、清華大学の李学勤氏が主導する清華大学蔵戦国竹簡（清華簡）の整理・研究も推進されるとのことである。

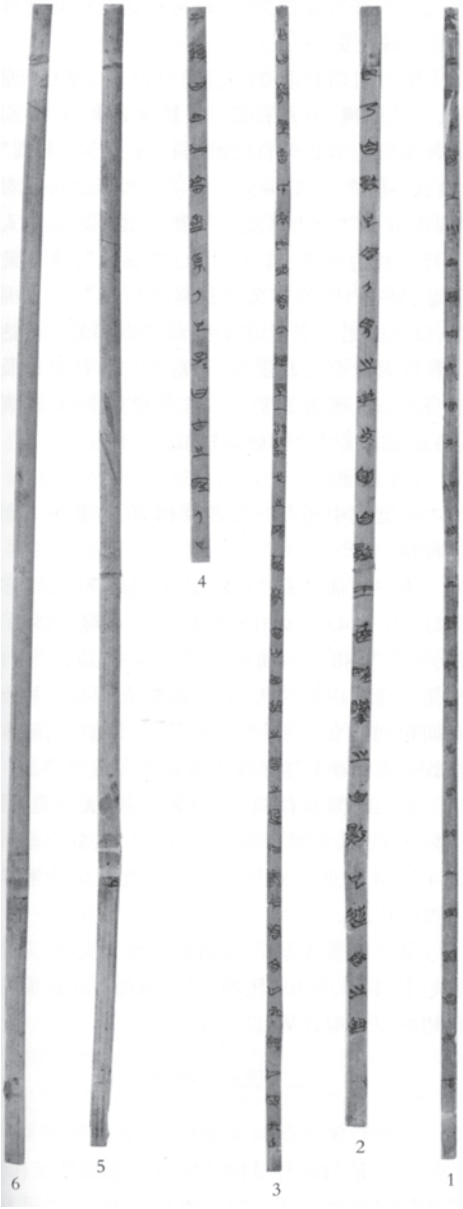
翻訳は、二〇一七年度大阪大学中国哲学研究室開講授業「中国哲学演習」において、湯浅邦弘教授の指導のもと、鳥羽加寿也（第一章担当）・原毎輝（第二章担当）・六車楓（第三章担当）の三名が分担し、中村成美（大阪大学大学院文学研究科博士前期課程、当時）が検討に加わった。また、全体の確認・調整を草野友子（大阪大学大学院文学研究科助教）が行った。

なお、「注」は「安徽大学蔵戦国竹簡概述」の注を翻訳したもの、本稿に引用している図・表は原著者の黄徳寛氏および文物出版社の許可を得て転載したものである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

二〇一五年の初め、安徽大学出土文献与中国古代文明研究協同創新中心はひとまとまりの竹簡を入手した。専門家による鑑定と竹簡サンプルの年代測定の結果、その年代は戦国時代であることが確認された。

初歩的な整理を経て、これらの竹簡には一一六七までの番号が付けられた。竹簡の保存状態は全体として良好で、完簡が比較的多い。竹簡の形制（訳者注：形状や構造のこと）は多様で、長さは不揃いであり、最短のもので約二一・三㎝、最長のもので約四八・五㎝、幅は〇・四～〇・八㎝である。長い竹簡の編縄は三道で、短い竹簡は二道となっている。残留物から、編縄は麻縄の類で、赤く染められているものもあることがわかった。竹簡の背面も情報が豊富であり、劃痕（訳者注：斜めに刻まれたひっかき傷状の線）や墨痕が少なからず残っており、竹簡番号やその他の文字が記されているものもあった。これらの竹簡は複数人によって書写され、書体の風格は多様で、字迹は鮮明であり、内容も非常に重要である（図一）。



図一　竹簡
（1.『詩経』類、2.楚史類、3.『曹沫之陳』、
4.諸子類、5・6.竹簡背面）

一、主な内容

初歩的な整理と分析識別を経て判明したことは、これらの竹簡はすべて書籍類の文献であり、その内容は経学・史学・哲学・文学・言語文字学など多岐にわたる。具体的には、『詩経』、楚国の歴史、孔子の語録などの諸子類の著作、楚辞およびその他の方面の作品が含まれ、その多くは伝世文献に見られないものである。

(1)『詩経』

竹簡の完簡の長さは四八・五㎝、幅は〇・六㎝、三道編縄で、一簡あたりの字数は少ないもので三〇字に満たず、多いもので四〇字に近い。竹簡の背面には劃痕があり、上下には留白がある。竹簡の表面の下部には番号が振られており、一から始まり、最後の一簡の番号は一一七となっている。実際に残っている竹簡は九七枚で、残りは欠失している。簡文の内容は、『詩経』国風の一部であり、「周南十又一」、「召南十又四」、「侯六」、「鄘九」、「魏九」（実際は十篇）のほか、「秦風」十篇があり、あわせて『詩』五八篇となっている。伝世の『毛詩』と比較すると、竹簡『詩経』の国風の排列順は『毛詩』とすべてが同じというわけではない。注目に値するのは、「侯風」が発見され、そこに属する六篇の詩は『毛詩』では「魏風」に属し、また竹簡の「魏風」の冒頭の「葛屨」を除いた他の九篇は『毛詩』の「唐風」であるということである。各国風の内部の詩の順序や数量も『毛詩』とはやや異なるところがある。各篇の詩は連続して書写され、篇の末尾には墨点が打たれており、いずれの詩にも篇題はない。多くの詩の章の順序は『毛詩』とは異なっており、異文はさらに多量に存在する。

(2) 楚史類

楚史類の竹簡は、その形制と字体の風格から二種類に分けられる。

第一組は、完簡の長さが三四㎝、幅が〇・六㎝、三道編縄、上部と下部に留白があり、一簡あたり二七～三〇字が記されている。竹簡の背面には劃痕あるいは番号があり、番号は数種類に分けられる。完簡は三〇〇枚以上あり、残欠しているものは比較的少ない。これらの竹簡は比較的整った楚国の官修の歴史書であり、簡文は「顓頊 老童を生む（顓頊生老童）」から始まり、楚の（献）恵王の「白公禍を起こす（白公起禍）」で終わっており、楚の先祖および熊麗以下恵王に至るまでの各王の死去・

即位や、重大な歴史的事件が記されている。

第二組は、一四〇枚以上あり、完簡の長さは三四・五～三五㎝、幅は〇・六～〇・七㎝、三道編縄、上部と下部に留白がある。簡文は比較的詰めて書かれており、各簡の字数は等しくなく、一簡あたり三七～四〇字である。簡文の内容は、楚国の重要な歴史的事件を集録したものであり、楚国および関係各国の多くの重大な事件に言及している。簡文は、一つの事件の記載の末尾ごとに、墨の記号によって分章が示されている。その中には、「陳子魚 陳に入り、駅葉に告ぐ。葉公見ゆ。春秋適に三百歳。（陳子魚内（入）陳、驛告葉、葉公見。春秋商（適）三百歳。）」と書かれているものがあり、これが第二組の末尾の竹簡であると考えられる。

（3）諸子類

諸子類の文献と見なされた竹簡の内容は、主に儒家であり、形制はそれぞれ異なり、いくつかの組に分けることができる。

第一組は、一三枚の完簡からなり、長さは四三㎝、幅は〇・六㎝、二道編縄である。上詰めで書かれており、上部と下部には留白がない。第一簡～第七簡の背面には番号があり、第七簡・第八簡・第十二簡の背面にもいくつかの文字が書かれているが、表面の内容とは直接関係はないようである。これらの竹簡には孔子の言論が集録されており、それぞれ「仲尼曰」で始まっている。簡文に残っている孔子の言論は、数条が今本『論語』と『礼記』などの書に見えるのみであり、文字も完全に同じというわけではない。

第二組は、三三枚の竹簡からなり、完簡の長さは四五・二㎝、幅は〇・六㎝、一簡あたり約三八字が記されており、三道編縄、背面には劃痕がある。内容は、子貢が孔子にまみえる話と二人の対話である。

第三組は、一四枚の竹簡からなり、長さは三六㎝、幅は〇・七五㎝、三道編縄、上下には留白がある。多くの竹簡の末端が残欠（一字あるいは二字が欠失）している。簡文は主に君子の守るべき行いについて述べ、たとえば君子の学や行に対する態度について、君子は「位を尊くし名を令（よ）くす（尊位令名）」、「貴位にて賤しきを忘れず、富めば則ち能く貨を以て分かつ（貴位不忘賤、富則能以貨分）」もので、「襲倹して倦まず（襲倹不倦）」「慎独」「敬信」でなければならない、などと主張する。

第四組は、一〇枚の竹簡からなり、綴合後は六枚の完簡となる。長さは四六・九㎝、幅は〇・六㎝、一簡あたり三五～四〇字が記されている。三道編縄、上部と下部

に留白があり、背面には劃痕がある。内容は、「昔三代聖王禹湯文武」と受（紂）・晋平公・宋景公らを正反の例として挙げ、「聖人は義を楽しみ利を美とす（聖人楽義而美利）」であることを述べ、「今人の美とする所と其の楽しむ所は各異なり（今人之所美与其所楽各異）」ということを指摘している。

第五組は、三二枚からなり、残欠しているものが多数を占める。完簡は三枚で、長さは二八㎝、幅は〇・五㎝、一簡あたり二二～二三字が記されている。二道編縄である。内容は、君子と小人とを比較し、君子の行動規範を論じ、「君子は日自ら新たにして、小人は日自ら厭う（君子日自新、而小人日自厭）」であることを指摘している。

第六組は、七枚からなり、完簡は二枚（やや残欠あり）。完簡の長さは約四四・二㎝、幅は〇・五㎝、三道編縄である。一簡あたり三四～三六字が記されている。この第六組には欠失している竹簡がある。内容は、天地・民人・四時は古今不変だが、「日月星辰行を改めず、然るに古は富みて今は貧しく、古は治まりて今は乱る（日月星辰不改行、然而古富今貧、古治今乱）」のは、当時の社会が「本正を失う（失本正）」という状態であったためだと述べている。

第七組は、二九枚からなり、完簡は二〇枚、その他は残簡である。完簡の長さは四六・三～四七・五㎝、幅は〇・七～〇・八㎝。竹簡の上下は丸くなっており、字は上に詰めて書かれ、上下に留白はない。一簡につき三一～三三字が記されており、三道編縄である。内容は、古の聖王の事績を例に「輔王之道」を論じており、文中には「虞・夏・商・周」および「堯・舜・禹・湯・文・武・秦穆・斉桓・晋文・句践・闔閭」といった帝王の名が見える。背面にはいくらかの文字が記されているが、表面の内容とは関連がないと見られる。

第八組は、約六〇枚からなり、完簡は九枚、長さは四四・二㎝、幅は〇・六㎝、三道編縄である。上下には留白があり、一簡あたり二七字が記されている。背面には番号が振られており、二つの組の番号になっているようである。内容は、申徒狄が周公にまみえる話と、申徒狄と周公との対話である。「申徒狄」という名は簡文に見え、「狄」は「易」に作り、「易也」とも称されている。簡文は、信陽長台関竹書（注1）および『太平御覧』に引用されている「『墨子』曰」（注2）と比較対照することができる。これらの竹簡は長台関竹書と同じ文献であり、長台関竹書よりも保存状態がよく、保存されている文字も長台関竹書よりもはるかに多い。簡文には申徒狄が最後に「因りて踣れ、退き、自ら河に投ず（因**伏**（踣）、退、自

投於河」をしたことを記載しており、これは『荘子』外物篇などの先秦の古典籍の「申徒狄因以踣河」という引用と符合する(注3)。長台関竹書の性質については、儒家か墨家かという論争があるが(注4)、この竹簡は比較的完全な形で残っているため、この問題についてさらに検討を進める一助となる。

第九組は、七八枚からなり、比較的整っているものが約四〇枚、完簡の長さは四八・四cm、幅は〇・六cmである。一簡あたり約四〇字が記されており、三道編縄、上下には留白がある。内容は、上博楚簡『曹沫之陳』(注5)と同一の文献であるが、個別の字についてはやや違いがある。

(4) 楚辞類

竹簡の形制と内容に基づくと、楚辞類の文献は二篇の完全に保存された作品であるといえる。

第一組は、二三枚あるいは二四枚からなり、完簡の長さは二一・三cm、幅は〇・六cm、二道編縄、上下には留白がない。一簡あたり一七あるいは一八字が記されており、背面には劃痕がある。内容は、舜の二人の妃が舜を悼むというものであり、楚辞の逸篇であると見られる。文中には、二配(妃)と重華などの人物や、地名「蒼梧」と「沅・澧・湘」などの川の名が見られ、『礼記』檀弓上の「舜 蒼梧の野に葬らる。蓋し三妃未だ之に従わざるなり(舜葬於蒼梧之野、蓋三妃未之従也)」(注6)および劉向『列女伝』の「舜 方を陟し、蒼梧に死す。号して重華と曰う。二妃 江湘の間に死す(舜陟方、死於蒼梧、号曰重華。二妃死於江湘之間)」(注7)というような記載と互いに証明できる。簡文は、舜の二妃である娥皇と女英が舜を悼むことを主題とし、「離居」の思いを述べており、楚辞の「離居を述ぶれば、則ち愴快として懐い難し(述離居、則愴快而難懐)」(注8)という特徴を表している。楚辞のこの逸篇の発見は、舜と二妃という題材が楚辞創作に与えた深い影響を明らかに示している。

第二組は、二七枚からなり、完簡の長さは三三cm、幅は〇・五cm、三道編縄、背面には番号がある。簡文の第一句には「善にして我を知る莫し(善而莫吾知)」とあり、作者は自らを徳が高く行いは善なる者とし、「小心翼翼」「吾を貴とすれども驕らず(貴吾不驕)」「吾を貧とすれども惑わず(貧吾不惑)」であるが、世に認められないと述べている。「寇盗富貴」「善者貧賤」「聖智亡遠」ということや、小人が勢いを得ているという社会現象に対しては、作者は「憂心之戚戚」であり、さらにこれを恥ずべき事とし、「信に従い義に与す(従信与義)」

「善の処る所に従う（従善之所処）」「寧ろ生きて飢うるも、死して祀らるること毋かれ（寧生而飢、毋死而祀）」「寧ろ言いて用いられざるも、知りて起こさざること毋かれ（寧言而勿用、毋知而弗起）」という態度を堅持するとし、社会が道義を失っていることや金持ちが不仁であることへの作者の批判、および自らの信義徳善を堅持することを表現している。この楚辞逸篇と『離騒』に現れる憂い怒る気持ちは非常に似ている。

（5）その他

これらの竹簡の中には、人相占いや夢占いといった方面に関わる資料がある。

第一組は、二二枚からなり、そのうち残簡は七枚で、多くは整っている。長さは四二・八cm、幅は〇・五cm、三道編縄、上下には留白があり、一簡あたり約三〇字が記されている。簡面の下部には番号があり、元は一八枚であったと見られる。内容は、人相占いであり、女性の身体的特徴と面相について、女子の「畜（やしな）うべからず（不可畜）」なものを列挙しており、また飲食に基づいて妊婦が生む子が男か女か美しいか貴いかを予測するものである。

第二組は、一一枚からなり、残欠が甚だしく、完簡はない。残簡の内容は、「某 金玉生肉生魚を得るを夢みる（某夢得金玉生肉生魚）」、「某 其の手を挙ぐる能わざるを夢みる（某夢不能挙其手）」、「鬼車鬼馬に乗り舟に乗るを夢みる（夢乗鬼車鬼馬乗舟）」といったものであり、これらは夢解釈の類の作品であると見られる。

第三組は、六枚からなり、綴合すると三枚になる。完簡は一枚であり、長さは四四・四cm、幅は〇・四cm、三道編縄である。これらの竹簡の正確な内容は理解しがたく、詳しい研究が待たれる。

二、国別と時代

竹簡は科学的な発掘品ではなく、その国別と時代についての鑑定は、竹簡の性質を判断する際の重要な基礎的作業である。これらの竹簡は、一定期間流伝し、人の手を渡ってきたものではあるが、幸い深刻な人為的損壊は見られない。すべての竹簡は、折り重なって一緒に固まっており、泥まみれのものが少なからずあり、各簡の順序は乱れている。竹簡を洗浄すると字迹がはっきりと出てきて、多くの竹簡の契口には編縄が残っており、編縄が赤色のものもある。地域と時代が明確な竹簡から判断すると、竹簡上に記されている文字には、戦国時代の

表一　加速器質譜（AMS）^{14}C測試年代表

编号	样品	树轮校正后年代	
		1（68.2%）	2（95.4%）
1	竹簡	400BC（45.3%）350BC	410BC（50.1%）340BC
2	漆皮	360BC（47.9%）290BC	360BC（95.4%）160BC
3	竹笥	410BC（68.2%）380BC	420BC（85.9%）350BC

楚の地の文字の風格があり、竹簡の形制などは戦国楚簡とおおむね一致している。これにより、これらの竹簡は戦国楚簡と見なすことができる。

すべての竹簡を整理し終え、初歩的な釈読を経たところ、竹簡の中に『詩経』や諸子類などの貴重な文献が含まれていることを発見した。とりわけ楚史や楚辞などに関する内容の発見は、この竹簡の地域と時代についての判断をさらに後押しすることとなった。この竹簡の中には、長台関竹書や上博楚簡『曹沫之陳』に相当する文献が見られ、このことも属する時代と国別をさらに証明するものとなっている。

この資料の年代を科学的に測定するために、空白の竹簡、竹笥の残片や漆片など三種類のサンプルを選び出し、北京大学加速器質譜実験室第四紀年代測定実験室に委託し、放射性^{14}C（炭素14）の年代測定を行った。同時に、文字のある竹簡の空白部分を取り出し、国家文物局重点科研基地湖北省荊州文物保護中心によって化学分析の測定が行われた。

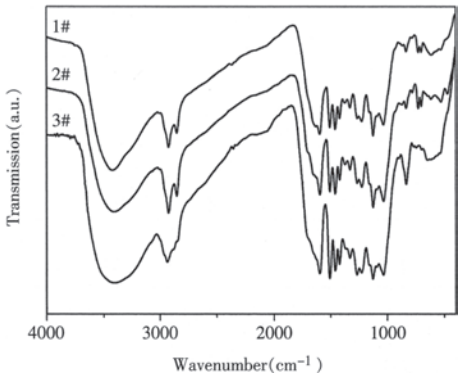
北京大学加速器質譜実験室第四紀年代測定実験室の測定結果によると、加速器質譜（AMS）^{14}Cは、樹輪の補正を加えた後の年代が今（一九五〇年）から約二二八〇年前であるとのことであった（表一）[注9]。

また、三つサンプルを選び取って、湖北省荊州文物保護中心に委託し、化学分析の測定を行った。三つのサンプルとは、1#荊州夏家台楚簡、2#安徽大学蔵戦国竹簡（信頼度を保証するため、文字のある竹簡から切り取った）、3#安徽大学蔵の竹笥の残片である。サンプルに対する総合的な化学測定を進めた結果、安徽大学蔵戦国竹簡と荊州の戦国楚簡とは似通っていることが判明した[注10]。

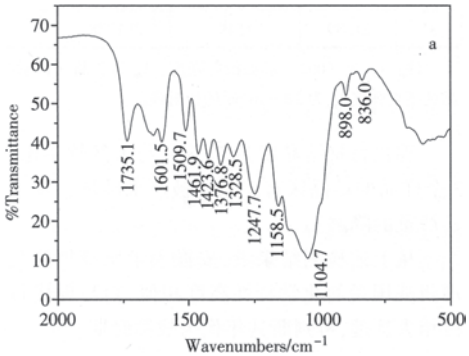
（1）赤外分光の分析

1#と2#の竹簡の赤外分光図はかなり接近しており、両者はいずれも三四一〇cm^{-1}の前後にヒドロキシ基による伸

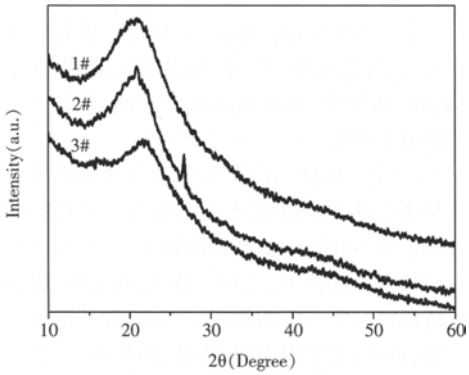
縮振動吸収が見られる。二八五二・二九二四 cm^{-1} の部分では、$-CH_2$ の対称と反対称伸縮振動吸収波が見られた。一五九七・一五〇七 cm^{-1} の部分では単核芳香族炭化水素の C=C 伸縮振動吸収波が見られた。3# では三四〇九 cm^{-1} の部分で広く吸収されており、二九三五の部分で飽和した C-H の吸収波が見られる。また、1# と 2# と同じく、一五九七・一五〇八 cm^{-1} の単核芳香族炭化水素の C=C 伸縮振動吸収波が見られた。三つのサンプルの赤外分光図は一致しており、現代の竹材とは大きく異なっている（図二・三）。



図二　竹材サンプル赤外分光図



図三　現代竹材赤外分光図



図四　竹簡サンプルＸ線回折図

（2）結晶度の分析

現代の竹材の中には主にセルロース、ヘミセルロース、リグニンという三種類の高分子物質が含まれており、その中でセルロースだけがより規則的な結晶構造を伴い、X線回折の中には鋭い回折波もある。そのため、竹や木の回折波の強度の変化はセルロース結晶の変化が反映され、これはセルロースの結晶構造がどれほど分解されているかを示している。セルロースの結晶度というのは、つまり結晶がセルロース全体を百分率でどれほど占めて

表二　竹材サンプル回折結晶度

样品	2θ (degree)	峰强度 (I_{002})	背景强度 (I_{am})	结晶度% ($I_{002}-I_{am}$) ÷ I_{002} ×100%
1#	21.2	1873	1689	9.82
2#	20.85	1897	1646	13.23
3#	21.89	1549	1388	10.39

注：I_{002}为（002）晶面衍射强度，I_{am}为非晶区衍射强度，对于纤维素 I，非晶区衍射强度 I_{am}为 2θ = 18°时的衍射强度。

いるのかを示すものである（図四・表二）。

現代の竹材の結晶度は約七二・六％で、天然の竹と比べるとこの三つの結晶構造はかなり破壊されており、分解が目立つ。

上述の測定結果から見ると、安徽大学所蔵の竹簡と荊州の戦国楚簡とは化学的特性や高度が似通っているが、現代の竹材とはかなり異なっており、その年代は戦国時期であると判断できよう。

三、価値と意義

安徽大学蔵戦国竹簡は数がかなり多く、保存状態も良好である。その内容は、経・史・子・集の各類の文献に及ぶ。特に『詩経』と楚史、楚辞類の文献が発見されたことは、大きな価値と意義を有している。

『詩経』や『尚書』などの儒家の経典は、中国の歴史や文化に広遠な影響を及ぼし、伝統文化の最も核となる文献である。簡本『詩経』は楚の地の抄本であり、現時点で時代がわかっている抄本としては最も古いものである。簡本『詩経』の発見は、『詩経』学研究の発展を促すであろう。簡本を伝世の『毛詩』や「三家詩」、阜陽漢簡『詩経』に照らし合わせて校正したところ、簡本にはそれらと共通するところがあり、その一方で明らかな違いもあった。簡本と各文献の異同は、『詩』三百篇が編成された時代や孔子刪詩説、『毛詩』の伝来と性質などの『詩経』学史上の重要な問題について、さらに検討を進めるための新たな手がかりを与えてくれるものである。簡本『詩経』中の大量の異文は、古文字学、文献学、中国語史の研究に対して貴重な新資料を提供している。

これらの竹簡の中から発見された楚史類の文献は、現時点で時代が最も古く、最も完全かつ体系的な楚史の資料であり、楚史研究の内容を非常に豊かにするものである。それは歴史を正し、また補うものであることから、先秦史とりわけ楚史研究においてきわめて重要である。

楚の早期の歴史的な伝説に関する記述は、伝世文献と矛盾しており、はっきりしない部分も含まれている。『史記』楚世家の記述によると、楚の祖先は帝顓頊に由来し、顓頊が称を、称が卷章を、卷章が重黎・吳回を、吳回が陸終を生んだとされる。陸終には子供が六人おり、それについては次のような記述がある。

六を季連と曰う、羋姓なり、楚は其の後なり。
（六曰季連、羋姓、楚其後也。）

季連 附沮を生み、附沮 穴熊を生む。其の後は中ごろ微にして、或いは中国に在り、或いは蛮夷に在り、其の世を紀すること能わず。周の文王の時、季連の苗裔を鬻熊と曰う。鬻熊の子は文王に事え、蚤に卒す。其の子を熊麗と曰う。
（季連生附沮、附沮生穴熊。其後中微、或在中国、或在蛮夷、弗能紀其世。周文王之時、季連之苗裔曰鬻熊。鬻熊子事文王、蚤卒。其子曰熊麗。）[注11]

楚世家に記されている「卷章」は「老童」のことであるということは、これまでの研究ですでに指摘されている[注12]。「重黎・吳回」は二人とも四人とも言われており、さまざまな意見がある。「穴熊」から「鬻熊」の間について、司馬遷は「其の世を紀す能わず（弗能紀其世）」と述べている。近年新しく出土した楚簡資料の中では、楚人が先祖を祀る場面で「老童・祝融・穴熊」と「老童・祝融・毓（鬻）熊」の二つの組み合わせに加え、「三楚先」の略称が見られる[注13]。安大簡の楚史類文献第一組の初歩的な整理の結果、楚の早期の系譜は帝顓頊が老童を生み、これが楚の祖先であるとされている。老童は重および黎、吳および韋（回）を生んだ。黎氏はすなわち祝融であり、六人の子供がおり、その第六子を季連といった。これが荊人となる。これについては、次のような記述が残されている。

融は乃ち人をして下りて季連に請わしめ、之を求むるも得ず。人 穴中に在るを見、之に問うも言わず、火を以て其の穴に爇（かし）げば、乃ち惧（おそ）る、告げて曰く、「酓（熊）なり」と。
（融乃使人下請季連、求之弗得。見人在穴中、問之不言、以火爇其穴、乃惧、告曰、「酓（熊）。」）

そして、熊は人づてに融にこのように告げた。

融曰く、「是れ穴の熊なり」と。乃ち遂に之を名づけて穴酓（熊）と曰い、是れ荊王と為る。（融曰、「是穴之熊也。」乃遂名之曰穴酓（熊）、是為荊王。）

穴熊は熊麗（麗）を生み、穴熊が亡くなると熊麗（麗）が王位についた。楚の祖先の由来や系譜について簡本は非常に明確に記しており、楚世家などの伝世文献と比較してみると、簡本には異なる点が主に六箇所あった。

一つ目は、老童が顓頊から生まれ、称から生まれていない点である。老童は四人の子供を持ち、それがすなわち「重及び黎、吳及び韋（回）（重及黎、吳及韋（回））」であった。簡本に見られる二つの「及」がこのように用いられていることから、四人の子供が二人と間違われないようにしていることは明らかである。

二つ目は、黎氏こそが祝融であり、重や吳・回ではないとする点である。

三つ目は、陸終についての記載が見られない点である。六人の子供を生んだのは祝融黎であることから、文献の陸終は祝融の誤りであると見られる。

四つ目は、季連とは穴熊のことであり、さらに簡文中に穴熊が名声を得た理由について説明している点である。

五つ目は、附沮の一代が存在しない点である。

六つ目は、穴熊が熊麗を生んだが、その期間の系譜が途切れていない点である。これも楚世家のいう鬻熊が穴熊であることを証明している。

以上は簡本の概要をまとめ、楚世家とのおおまかな比較・校勘を行っただけのものである。しかし、ここからわかるように、簡本は楚の早期の伝説や歴史を整理し、整合性を取っている。その記述は詳細かつ正確で、研究に有効な手がかりが明確に記されている。楚の祖先の歴史記録に関する『史記』の矛盾と不明確な部分について、簡文は非常にはっきりと説明しているのである。簡文の記述によると、本来老童は顓頊から生まれ、楚人の祖先であった。そして、老童が祝融を、祝融が季連を生んだ。その季連こそが穴熊であり、楚の直系の祖先である。そのため、楚簡の中に「老童・祝融・穴（鬻）熊」の三人の祖先を祀るという記載があり、「三楚先」はこの三人の略称に違いない。長きにわたり研究者を困らせてきた問題が、簡本の楚史の記述によってまさに解明されたのである。安大簡の楚史は、その他の楚簡の楚の先祖・系譜に関する記述と一致していること、戦国時代にはすでに楚人が統一的な見方をしていたということを証明したのである。それゆえに我々は、安大簡の楚史はお

そらく楚の官修の史書であると考えている。

これらの竹簡の諸子類文献の中に含まれている孔子語録などの儒家類文献は、戦国時代における儒家の学説の伝播と発展に関する研究に対して、新たな資料を提供している。たとえば、申徒狄や曹沫らに関わる文献については、すでに発見されている関連文献との比較・校勘や総合的な研究を進めることが可能となった。また、楚辞類の文献は、楚辞の形成・発展や先秦文学史研究に対して重要な意義を備えている。

安徽大学蔵戦国竹簡は、郭店楚簡・上博楚簡・清華簡につぐ先秦文献の重大な発見であり、中国の古代文明の研究において大きな価値がある。研究が深まるにつれ、これらの竹簡は古代の経学史・思想史・楚史・文学史・言語文字などの領域に必ずや重要な影響を及ぼすであろう。

注

（1）河南省文物考古研究所『信陽楚墓』、文物出版社、一九八六年。

（2）（宋）李昉ら『太平御覧』巻八〇二「珍宝部二」、三五六〇頁、中華書局、一九九五年。

（3）（清）郭慶藩撰、王孝魚点校『莊子集解』、九四四頁、中華書局、一九八五年。

（4）長台関楚簡の墨家・儒家の論争については、李学勤『簡帛佚籍与学術史』（三五二～三五九頁、江西教育出版社、二〇〇一年）、楊沢生「長台関竹書的学派性質新探」（『文史』二〇〇一年第四期）、李零「長台関楚簡〈申徒狄〉研究」（『簡帛古書与学術源流』、生活・読書・新知三聯書店、二〇〇四年）参照。

（5）馬承源主編『上海博物館蔵戦国楚竹書（四）』、上海古籍出版社、二〇〇四年。

（6）『十三経注疏・礼記正義』、一二八一頁、中華書局、一九八二年。

（7）張涛『列女伝訳注』、四頁、山東大学出版社、一九九〇年。

（8）（梁）劉勰著、范文瀾注『文心雕龍注』、四七頁、人民大学出版社、一九六二年。

（9）この測定作業は、北京大学加速器質譜実験室第四紀年代測定実験室によって完成し、測定結果はそのセンターの提供による。

（10）この測定分析は、湖北省荊門文物保護中心の方北松研究員によって完成し、測定報告もその記録と提供によるものである。

（11）『史記』楚世家、一六八九～一六九一頁、中華書局、一九六三年。

（12）『史記』楚世家、裴駰『集解』引譙周曰「老童即卷章」、一

六八九頁、中華書局、一九六三年。

（13）黄徳寛「新蔡葛陵楚簡所見「穴熊」及相関問題」、『古籍研究』二〇〇五年巻下、安徽大学出版社、二〇〇五年。